

山城 京都

近松と育んだまら

(京都府京都市)



春 (上賀茂神社)

平安京以来の千二〇〇年の歴史に育まれた自然と伝統文化が調和するまちです。季節の移り変わりも美しく、四季折々に人々を楽しませてくれます。日本三大祭のひとつ葵祭、八坂神社の祇園祭、秋の紅葉。洛北、洛中、洛南を貫いて鴨川が流れ、二条城、御所、賀茂神社の緑が心を潤します。

京都駅の南東、東山区に臨濟宗大本山東福寺があります。東福寺の紅葉は有名で秋の京都には欠かせないものの一つではないでしょうか。その塔頭の一つに芬陀院雪舟寺があり、近松が京都で最初に奉公に出た一条禅閣恵観の茶室があります。美しい紅葉をながめながら、近松もお茶をいただいたのかもしれないですね。



夏（総本山永観堂禪林寺）

哲学の道の西方四〇〇mくらいに、真如堂しんにょどうというお寺があります。ここには、近松が一期仕えた正親町公おきまちきんみち通の墓所があります。哲学の道は、若王子橋から銀閣寺橋までの約2kmにわたる疏水そすいべりの小道で、哲学者西田幾多郎が思索の道として散策したことから名づけられました。春は桜、秋は紅葉の名所として京都内外から多くの人が訪れます。鴨川の流れはおだやかに、昔も今も華やかな京をながめてきました。夏には納涼



京都市街

床が並び、涼を求める人々がそぞろ歩きます。近松が住んでいた頃の四条河原は、劇場が立ち並び一大娯楽街でした。近松は二十歳代の前半に公家奉公をやめ、宇治加賀掾との出会いをきっかけに芝居の世界に入っていきました。加賀掾はじめ坂田藤十郎や芳沢あやめなどの当時は有名であった役者や関係者との付き合いを深めていったのです。

近松が京都で歌舞伎の作品を書いていたころの、日記が残っています。道化役者で作者も兼ねていた金子吉左衛門が、元禄十一年（一六九八）の生活を自ら記録したものです。その中で金子や近松は、役者の坂田藤十郎や他の役者達と、毎日のように狂言の相談をしています。日記によると、金子の住まいは四条大橋の近くにあったようです。夕方に金子宅を訪れ夜中に自分の家に帰るなど、近松も近所に住んでいたのではないのでしょうか。

山科区御陵、天智天皇山科陵の北に本圀寺があります。元々下京の西本願寺北



四条河原の芝居町

(臨川書店刊『新修京都叢書』第八)



冬（東福寺通天橋）



秋（大覚寺大沢の池）

にあった本圀寺には、近松の父や兄が葬られています。父が亡くなったのは近松が三十四歳（数え年で三十五歳）の時です。

『けいせい壬生大念仏』みぶだいねんぶつ 『女郎来迎柱』じようららいじうばしら 『壬生秋』みぶあき の念仏ねんぶつ の三部作でおなじみの壬生寺は、二条城

の南にあります。平安時代からの古い寺院で、壬生狂言、新撰組ゆかりの寺としても有名です。

思春期の頃に京都に移り住み、少年時代を過ごした田舎とはまったく環境の異なる大都市での生活は、近松にどんな影響を与えたのでしょうか。公家奉公、四条河原の芝居町、たくさんの人との出会いと別れが、作者としての近松を育んでいったのでしょうか。